

アメリカにおける CCSS(Common Core State Standards)と学校図書館界

^a 山 本 貴 子
^b 大 城 善 盛

1. はじめに

アメリカ合衆国（以下、アメリカ）憲法の修正第 10 条には、「この憲法が合衆国に委任していない権限または州に対して禁止していない権限は、州または国民に留保される」と規定されていて、アメリカでは教育の権限は州が握っている。わが国の文部科学省が定める学習指導要領のようなものはない。そこで、今後アメリカが国際的な経済競争の中で勝ち抜いていくための人材養成を視野に入れた、全米州知事会（National Governors Association Center for Best Practices、以下 NGA Center）と全米州教育長協議会（Council of Chief State School Officers、以下 CCSSO）が共同で、「大学進学や就職に十分な能力や技能を有して卒業できるための教育（学習）基準」という名称で 2010 年に作成したのが「全州共有基礎基準」（Common Core State Standards、以下 CCSS）である。

アメリカの学校図書館界では、この CCSS が大きな話題となっており、特にアメリカ・スクール・ライブラリアン協会（American Association of School Librarians、以下 AASL）は積極的に対応し、その基準を受け入れている。CCSS と学校図書館との関連に関する先行研究としては井上のものがあるが¹⁾、その文献は学校図書館における電子書籍が主なテーマであるため、十分な紹介や考察はなされていない。この論稿では、最初に CCSS を紹介し、次にニューヨーク州（State of New York）や AASL の対応を概観し考察する。

2. 「全州共有基礎基準」(CCSS) の概要

教育に大きな関心を寄せるビル・メリンダ・ゲイツ財団 (Bill & Melinda Gates Foundation) は 2007 年に NGA Center、CCSSO、Achieve に 2,700 万ドルを寄贈して、全米の学校に共通するコア・カリキュラム (科目) を開発させた。なお、Achieve とは、「基準に則った教育」を掲げて教育改革をめざす州知事や企業のリーダーたちによって組織されている団体である。その結果、『成功への基準作り』(*Benchmarking for Success*) という報告書が作成された。同財団は、2009 年には CCSSO に 1,200 万ドル、NGA Center には 2009-2011 年間に 200 万ドルを寄贈した。そのようなことから、NGA Center と CCSSO は 2009 年にパートナーシップを組み、コア・カリキュラム (科目) の作成努力を続け、Achieve は評価役を務めた。そして、2010 年に公表されたのが「全州共有基礎基準」(CCSS) である。その基準は、NGA Center、CCSSO、College Board 等の共同プロジェクト名である Common Core State Standards Initiative から web 上で公表されている。CCSS の内容は、高校卒業時における「言語、読み、話す・聞く、書く」領域において、大学進学と就職の準備完了の基準と、アメリカでは義務教育である幼稚園から、高校まで学年ごとに期待される英語 (国語) (English language arts) ・歴史・社会・科学・工学領域におけるリテラシー、および算数 (数学) の基準、の 2 種の学習基準である²⁾。

高校卒業時に「言語」領域で達成されている基準とは、①話したり聞いたりする際に、標準的な英語の文法や使用法を理解している、②異なる文脈で言語がどのように機能するかを理解している、③語句を分析したり、レファレンス資料を使ったりして、知らない単語や熟語を理解する、などのことである。

高校卒業時に「読み」領域で達成されている基準とは、①精密に読んでテキストが何を言おうとしているかを明確に理解し推論もできる、②テキストに基づいて結論を導くような話をしたり書いたりする際に、どの部分

を証拠として使っているかを示すことができる、③テキストの中心的な主題を指摘することができ、その発展課程も分析できる、④技術的な用語や図表も含めて、テキストで使われている語や語句を理解できる、⑤特定の文や節が互いに、そして全体的にいかに関連しているかも含めて、テキストの構造を分析できる、などのことである。

高校卒業時に「話す・聞く」領域で達成されている基準とは、①さまざまなパートナーとの会話や協働に参加し、他人のアイデアを参考にし、自分の考えを明確に説得力をもって話すことができる、②視覚的・口頭的なことも含めて、さまざまなアイデアや形態で提示された情報を統合し評価することができる、③話し手の見解、理論、証拠、レトリックを評価できる、④聴衆が納得できる形で情報、成果、証拠を提示できる、⑤電子メディアや視覚的な提示法を有効に利用することができる、などのことである。

高校卒業時に「書く」領域で達成されている基準とは、①見解を裏付けのような論点の書き方ができる、②正当な理論づけや妥当で十分な証拠を伴ったテキストを書くことができる、③複雑なアイデアや情報を明確に正確に伝えるために、効果的な選択、組織化、および分析を行って説明的なテキストを書くことができる、④効果的なテクニックを使って、現実的な経験や想像的なできごとの物語を書くことができる、⑤書いたものを変更、修正、書き直し、または新しい視点から試みる、などのことができる、⑥出版したり、他人との交流の際にインターネット等の技術を使うことができる、⑦複雑なソースから適合する情報を集め、各情報の信頼性や正確性を評価し、剽窃を避けながら総合することができる、などのことである³⁾。

他方、オバマ政権下の連邦政府教育省 (U. S. Department of Education) は、アメリカが国際的な経済競争の中で勝ち抜いていくための人材養成を視野に、2009年に成立した「アメリカ回復・再投資法」(American Recovery and

Reinvestment Act) から捻出された 43 億 5,000 万ドルを基に、州に教育改革を競わせる「頂上への競争」(Race to the Top) というプログラムを 2009 年に発表した。各州はその助成金を獲得するためには、次のような教育改革を行わねばならなかった⁴⁾。

1) 生徒の全体的な学業成績が向上し、生徒間の成績ギャップが埋まり、高校生の卒業率は向上し、卒業時には大学進学もしくは就業への準備ができていること。

2) 次の 4 つの重要領域で改革がなされること。

a) 大学や職場で成功するような生徒を育成するために、国際的な基準や評価システムを採用すること。

b) 生徒の成功を測定するようなデータ収集システムを構築し、いかにしたら教育を向上させるかを教員や校長に知らせられること。

c) 教員の配置を適正化し、教育の効率が高められるようになること。

d) 成績の悪い生徒を抱えている学校を 180 度転回させられること (成績の良い生徒を抱える学校の部類に入るような仕組みを作ること)。

CCSS の作成に関しては、連邦政府は直接的な関わりを持っていなかったが、上記の連邦政府の教育政策である「頂上への競争」は、CCSS の普及に大きな影響を及ぼした。連邦政府教育省は 2009 年度を振り返り、「『頂上への競争』は歴史上、他のどの連邦教育プログラムよりも州と学区の教育法と政策に積極的な改革をもたらした。(中略) 13 州がチャーター・スクールを拡大するために教育法等を改正し、37 州が CCSS を採用し、17 州が教員の評価制度を変更し、11 州が学力テストのデータを教員評価の際に利用するような法を採択している」と述べている⁵⁾。

このように、CCSS は 2010 年に web 上で公表される以前から既に多くの州の教育基準に採用されるようになっていた。すなわち、連邦政府の教育政策と CCSS がうまく適合していた。

オバマ政権は2010年3月には「改革への青写真—初等中等教育法の改正—」(A Blueprint for Reform: The Reauthorization of the Elementary and Secondary Education Act)を連邦議会に提出した。「改革への青写真」は、2020年までに大学・短大の卒業率に関して再び世界をリードすることをめざす初等中等教育改革に関する政策文書である⁶⁾。

アメリカでは、不利な環境にある児童生徒と有利な環境にある児童生徒の間の学業成績のギャップを埋めるために、さらには国際的な経済競争を勝ち抜くために、2002年に「落ちこぼれ防止法」(No Child Left Behind Act、以下NCLB法)が制定された。しかし、NCLB法は厳格な説明責任を伴ったため、学校現場では過度に標準テストを重視したり、カリキュラムの幅を狭めたりするなどの問題点が指摘された。他方、NCLB法の成立を契機に、州の教育政策の鍵を握る人たち(州知事や州の教育長)の間にも教育改革の動きが見られるようになった。2005年に開催されたNGA Centerの第5回教育サミットのテーマは、大学進学や就職とうまく結び付くような方向での高校教育の改革であった。上記のような流れの中で、2009年にNGA CenterとCCSSOが共同で作成することを決め、2010年に仕上げたのがCCSSである。

NGA CenterとCCSSOは、CCSSの作成に際しては次のような関わり方で多くの現場の教員の意見を聞いたり参考にしたりしたとし、NGA CenterとCCSSOの一方的な考え方ではないことを強調している⁷⁾。

1) 多くの教員が英語と数学の基準作成のメンバーであったり、レビュー・グループであったりした。

2) 全米的な教育団体、特に全米教育協会(National Education Association)、アメリカ教員連盟(American Federation of Teachers)、全米英語(国語)教師協議会(National Council of Teachers of English)、全米数学教師協議会(National Council of Teachers of Mathematics)等がレビューのために教員を派遣してくれた。

3) 州ごとにレビューが行われた際に、多くの教員がレビュー・チームのメンバーであった。

CCSS は、リテラシーを含めた国語力（英語力）と数学の学習基準であるが、高校卒業時における「読む・聞く・話す・書く」の基準に達した生徒は次のような能力を有するとしている⁸⁾。

1) 独立性を有することを示す。(⇒生徒はさまざまな領域やタイプの複雑なテキストを理解し、評価することができる。効果的に議論を展開し、複合的で複雑な情報の提示もできる。)

2) 強い主題的な知識を獲得する。(⇒質や量のある作品や材料と取り組むことによって、複数の領域にまたがる知識を獲得する。)

3) 聴衆、課題、目的、主題等のさまざまな要求に応えることができる。(⇒課題によって読む・書く・話す・聞く・言語操作、等をうまく組み合わせることができる。)

4) 理解すると同時に批判することもできる。(⇒著者や話し手が言っていることを正確に理解するために勤勉になる。同時に、著者や話し手の仮説や前提に対する批判心を持ち、主張の正当性や理論の正確性を評価することができる。)

5) 証拠を重要視する。(⇒テキストに関して口頭もしくは文字によって解釈を述べる際、自分の見解の基になっている特定の証拠を示すことができる。また、他人の利用している証拠を客観的に評価できる。)

6) テクノロジーや電子メディアを有効かつ戦略的に利用する。(⇒読む・書く・話す・聞く・言語操作、の際にテクノロジーを思慮深く利用する。有用な情報を効率よく入手するためにオンライン検索を行う。テクノロジーを利用して学んだものをオフラインで学んだものと統合する。さまざまなテクノロジーや電子メディアの利点や限界を知っていて、コミュニケーションの目的に応じて最適なものを選択することができる。)

7) 他の視点や文化があることを理解するようになる。(⇒ 21 世紀の学

校や社会にはさまざまな文化が存在し、さまざまな経験や視点を持つ人々が共に学び、共に働いていく必要があることを学ぶ。)

上記の能力や技術が CCSS の最終目標とするものであるが、それは AASL が 2007 年に作成している「21 世紀の学習者のための基準」(Standards for the 21st-Century Learner) と類似している。

3. 「全州共有基礎基準」(CCSS) とニューヨーク州の図書館界

3.1 ニューヨーク州の「共通基礎学習基準」(Common Core Learning Standards)

ニューヨーク州は、CCSS が公表された翌年の 2011 年に、約 15% を追加・変更して州の学習基準を作成した。州基準の名称は「共通基礎学習基準」(Common Core Learning Standards、以下 CCLS) である。CCLS は CCSS と比べて次のような特徴を有していると述べる⁹⁾。

1) 幼稚園児から 12 年生まで徐々に複雑さを増している。その線に沿って生徒が何を学ぶ必要があるか、また何ができるようになる必要があるか、を生徒が説明できるよう手助けしている。そして、その手助けは生徒の能力に応じて行うようにしている。

2) リテラシーの育成をすべての科目担当教員の共同責任としている。

3) (文学テキストでなく) 情報テキストの読み方を教えることを強調している。

4) より複雑なテキストを理解できるよう、すでに向上しつつある生徒のさらなる向上を強調している。

5) 基準や学年間に「調査技能」(research skill) を統合させている。

6) 生徒が高校卒業時に大学レベルの書く能力を備えているよう、上級学年では書く能力を強調している。

3.2 「全州共有基礎基準」(CCSS) と「エンパイア・ステイト情報フルエンシー連続体」

ニューヨーク市学校図書館システム部 (New York City School Library System、

以下ニューヨーク市学校図書館部)は、アメリカ図書館協会(American Library Association、以下ALA)の元会長であり、学校図書館界でも「探究のストリップリング・モデル」(Stripling model of inquiry)等で著名なストリップリング(B. Stripling)を筆頭責任者として、2009-2010年に学校図書館のサービス目標となる「情報フルエンシー連続体」(Information Fluency Continuum)を作成した。

他方、AASLは、2007年に「21世紀の学習者のための基準」を作成し、2009年には『学習者に力を与える』(*Empowering Learners: Guidelines for School Library Media Programs*)と『21世紀の学習者のための基準の実施』(*Standards for the 21st-Century Learner in Action*)を刊行していた。そのため、ニューヨーク市学校図書館部はそれらとの整合性を保つために「情報フルエンシー連続体」に修正を施した。さらに、2011年にニューヨーク州から上記のCCLSが公表されたので、それとの整合性を保つために再度の修正を施し、名称を「エンパイア・ステイト情報フルエンシー連続体」(Empire State Information Fluency Continuum: Benchmark Skills for Grades K-12/Assessments/Common Core Alignment、以下ESIFC)に改称した。そして、ニューヨーク州図書館協会(New York Library Association)とニューヨーク州学校図書館システム協会(School Library Systems Association of New York State)の支持も取り付けた¹⁰⁾。

ESIFCは、サブタイトルが示すように、①幼稚園児から12年生までの標準的な技能、②測定・評価、③CCLSとの整合性、の3部構成となっている。①幼稚園児から12年生までの標準的な技能は、a)理解し新しい知識を創造するための探究力、b)人間的、審美的成長、c)社会的責任性の具体的表示、の3つの学習(技能)基準で構成されている。

②測定・評価は、上記の3つの学習(技能)基準の測定・評価法に関して記述されている。最後の章の「CCLSとの整合性」はESIFCとCCLSとのマッピングである。そして、ESIFCがCCLSといかにうまく整合しているかを示し、スクール・ライブラリアンがCCLSの目標を達成する際にい

かに重要であるかを強調している。また、ESIFC は次のようにも記している¹¹⁾。

リテラシー育成のための CCLS は、すべての生徒が高校卒業時に大学進学や就職の準備ができているようにするための枠組みを設定している。CCLS と探究技能や探究戦略との関係は強力で多面的である。生徒が CCLS を達成できるためには情報フルエンシー技能の指導と学習が必要である。ESIFC の中に記されている探究技能や探究戦略は CCLS と整合して、CCLS の中に記されている「探究」育成のためのクラスでは教員とライブラリアンが協働の計画を立てることを可能にしている。教員とライブラリアンの協働は、CCLS の高度な期待に沿う形の情報フルエンシー及び探究技能を教える際の最も有効な教育手段である。

以上、ニューヨーク州とニューヨーク市の状況を概観した。簡潔に述べると次のようになる。ニューヨーク州は CCSS をそのまま採用している訳ではなく、いくぶん修正を施した CCLS を作成している。しかし、一般的にはニューヨーク州は CCSS 採用州として理解されている。なお、ニューヨーク州の学校図書館界では CCSS のセミナーが開かれることもある。ニューヨーク市の学校図書館界は独自の情報リテラシー基準を作成していたが、AASL の 2007 年の「21 世紀の学習者のための基準」や 2010 年の『21 世紀の学習者のための活動基準』等の刊行により、それらへの整合性を保たせるための修正を行った。さらに、CCSS に基づくニューヨーク州の CCLS の作成により、それへの整合性を保たせるために修正した。そして、最新の情報リテラシー基準は ESIFC と称し、ニューヨーク州図書館協会やニューヨーク州学校図書館システム協会の支持を得ている。換言すれば、CCSS は基本的にニューヨーク州やニューヨーク市の学校図書館界で受け入れられ、ニューヨーク州やニューヨーク市の学校図書館のサービス目標と一致している、ということである。しかし、CCSS や CCSS は主題

領域も含めた広範囲のものであり、学校図書館のサービス目標との関係はその1部であることは言うまでもない。

4. 「全州共有基礎基準」(CCSS)と

アメリカ・スクール・ライブラリアン協会(AASL)

アメリカ・スクール・ライブラリアン協会(AASL)は学校図書館のサービス目標として1998年に「生徒の学習のための情報リテラシー基準」(The Information Literacy Standards for Student Learning)を作成した。しかし、21世紀に入り、マルチメディア・リテラシー、メディア・リテラシー、コンピュータ・リテラシー、印刷物リテラシー、文化リテラシー、等の用語が出現して「情報リテラシー」の概念も曖昧となり、「情報リテラシー」の概念だけでは学校図書館のサービス目標を規定することは不可能ということで、2007年には「21世紀の学習者のための基準」を作成した。「21世紀の学習者のための基準」は、①尋ね、批判的に考え、知識を得る、②結論を導き、根拠に基づく決定をし、新しい状況に知識を応用して新しい知識を生み出す、③知識を共有し、倫理的、生産的に民主主義社会に参加する、④人間的、審美的成長をめざす、の4つの学習基準で構成されている。AASLは「21世紀の学習者のための基準」の普及を計るべく、2009年には『学習者に力を与える』と『21世紀の学習者のための基準の実施』を刊行した。

そのような状況の中で、CCSSが公表された。2章で概観したように、CCSSは生徒の批判的思考力や証拠に基づく論証力を重視している。AASLはそのCCSSを綿密に検討し、AASLの提唱する「21世紀の学習者のための基準」と整合すると理解し、2011年にはCCSSの中の「英語の基準」(English Language Arts)、「歴史と社会の読み能力基準」(Reading Standards for Literacy in History/Social Studies)、「科学と工学の読み能力基準」(Reading Standards for Literacy in Science & Technical Subjects)、「歴史、社会、科学、工学の書き能力基準」(Writing Standards for Literacy in History/Social Studies, Science, & Technical Subjects)と「21世紀の学習者のための基準」をマッピングさせ公

表している。幼稚園から12年まで学年ごとのマッピングを行い、2012年には数学分野でも行っている¹²⁾。

2013年には、AASLは上記のAchieveと組んで、『全州共有基礎基準の実施：スクール・ライブラリアンの役割』(Implementing the Common Core State Standards: The Role of the School Librarian、以下『CCSSの実施』)を作成・公表している¹³⁾。

それは、サンノゼ州立大学(San Jose State University)の図書館情報学部(School of Library and Information Science)のローチュア教授(D. Loertscher)とオクラホマ州のスクール・ライブラリアンであるルイス(K. Lewis)によって共同執筆された。

『CCSSの実施』はAchieveとの共同作成になっているが、Achieveは2012年には『全州共有基礎基準の実施：中学校指導者の役割』(Implementing the Common Core State Standards: The Role of the Secondary School Leader)、『全州共有基礎基準の実施：スクール・カウンセラーの役割』(Implementing the Common Core State Standards: The Role of the School Counselor)等を共同作成しており、言わばCCSSの実動部隊である。

『CCSSの実施』は、「序文」で次のように記している¹⁴⁾。

スクール・ライブラリアンは学校変革のビジョンを分かち合うスペシャリスト軍団の一員である。スペシャリスト軍団とは、読書スペシャリスト、テクノロジー統合スペシャリスト、カリキュラム・スペシャリスト、等のことである。それらスペシャリストが互いに協力することによって伝統的な孤立したクラスを崩すことができる。さらに、スペシャリストと教員は協力することによってすべての生徒を優秀にする参加型文化を創造することができる。(中略)特にスクール・ライブラリアンが情報とテクノロジーに溢れた学習環境の中で学校全体の学習活動に関わることによって、学校の刷新は強化される。このような理解に基づいて、この文書は、情報とテクノロジーに溢れた環境が当然のようになってき

ている現代、学校図書館プログラムが資料の倉庫という伝統的な役割から脱却し、生徒の学習活動に積極的に関わることを提唱する。

『CCSS の実施』は、さらに「はじめに」で次のようにも記している¹⁵⁾。

Metlife の 2010 年の「アメリカの教員調査」(Survey of the American Teacher)によると、85%の教員がすべての生徒が高校卒業時には大学進学や就職の準備ができているべきであると思っている¹⁶⁾。また、Metlife の 2009 年の調査によると、86%の教員が目標を高いレベルに設定すると生徒の成績もそれに応じて良くなると信じている¹⁷⁾。CCSS はそのような信念と歩調を合わせたものである。(中略) CCSS はアメリカの生徒が数学とリテラシーにおいて他国の生徒と肩を並べられるようにするものである。

『CCSS の実施』によると、スクール・ライブラリアンは CCSS を実施に移す場合、次の 3 ステップが必要になるという¹⁸⁾。

1) CCSS を理解する (⇒ CCSS のどの部分が学校図書館プログラムや情報技術と重なるかを理解する)。

2) 計画する (⇒その際、スクール・ライブラリアンと他のスペシャリストによるどのようなプロジェクトが教授と学習に最も大きな変化をもたらすかを理解する)。

3) 実施する (⇒その際には、どのような学校図書館と情報技術のプログラムが教授と学習に最も大きな影響を及ぼすかを理解する必要がある)。

上記の「3) 実施する」の際、スクール・ライブラリアンには次のような役割が必要になる¹⁹⁾。

1) 「カリキュラム全体を通して読書力、書く力、話す力、聞く力を育成

する」の領域におけるスクール・ライブラリアンの役割（抜粋）

a) カリキュラム作成の会議に出席する。

b) テキストのプレビュー、テキストの注釈、グラフィック・オーガナイザーを使うなどして、読み書きの指導戦略の模範を示す。

c) 話題になっているトピックをあらゆる観点から理解できるようにするために、情動的なものや文学的なものを備える。

2) 「識字文化として、カリキュラム全体を通して最高の文学や最善の情報資料を認識できるように育成する」の領域におけるスクール・ライブラリアンの役割（抜粋）

a) 図書館ラーニング・コモン（図書館の別称）を学校の識字文化のセンターにする。

b) さまざまなテクノロジーを利用して、成人と生徒を対象にしたストーリーテリングやデジタルのストーリーテリングの機会を設ける。

c) さまざまな領域で様々なテクノロジーを利用して、児童生徒が物語、本、詩を書いたり、出版したりする機会や、オリジナルなメディアを作成する機会を設ける。

3) 「学校全体で参加文化を創り出す」の領域におけるスクール・ライブラリアンの役割（抜粋）

a) 教員の間で専門職的な学習コミュニティを構築する際に協働する。

b) 学校図書館の web サイトの代わりに、参加型の「バーチャル・ラーニング・コモン」を構築する。

c) 横断的なクラス、横断的な学年、横断的な学校プロジェクトに参加する。例えば、他の学校との協働学習や読書プロジェクトの機会を設ける。

4) 「さまざまな学習経験をさせる意図の下での共同で教える調査プロジェクトの構築」の領域におけるスクール・ライブラリアンの役割（抜粋）

a) クラスや図書館ラーニング・コモンで生徒が探究プロセスを利用するような調査プロジェクトを教員と共に計画する。

b) 生徒が調査トピックを選択する際や、長期の調査プロジェクトを計画する際に手助けする。

c) 生徒が自分の調査成果をオンラインの協働メディアを利用して、先生や仲間と分かち合う機会を設ける。

5) 「豊富な情報資源と有用なツールを利用する学際的で現実的な課題、プロジェクト、学習経験を促進する」の領域におけるスクール・ライブラリアンの役割 (抜粋)

a) 現実味のある学習プロジェクトを作成する際に学際的なパートナーシップを構築する。

b) 図書館ラーニング・コモンにクラスの延長となるようなスペースやバーチャルなスペースを設ける。

c) 生徒を現実的、起業的、および刷新的な課題に取り組ませるために、教員と共にさまざまな戦略を用いて実験をする。

6) 「共に教え、共に学ぶという雰囲気を高めるためにテクノロジーを利用する」の領域におけるスクール・ライブラリアンの役割 (抜粋)

a) 強力な Wi-Fi が図書館ラーニング・コモンと学校に導入され、“Google Apps for Education” のようなシステムがすべての教員と生徒に使えるよう、テクノロジーのリーダーと協働する。

b) 学校コミュニティが広い範囲でオンライン・ツールやソーシャル・メディアにアクセスできるようにするために、学校のリーダーと協働する。

7) 「学校横断的に、もしくはコミュニティ等で文化経験を創出する」の領域におけるスクール・ライブラリアンの役割 (抜粋)

a) 図書館ラーニング・コモンをパフォーマンスや展示の場所として利用する。

b) グローバルな学習経験を奨励する。

c) 協働的なパートナーシップを構築するために、地域の公共図書館、博物館、大学、企業、および地域の団体と協働する。

8)「創造性、刷新、遊び、構築、実験性を確保する」の領域におけるスクール・ライブラリアンの役割(抜粋)

a) すべての年齢の学習者が「実験する、構築する、デザインする、遊ぶ、および発明する」場所を設ける。さらに、発明家や起業家と交流する場も設ける。

b) 児童生徒は学習者であると同時に教師でもあることの認識を高める。

c) 学校図書館ラーニング・コモンを放課後のプログラムの場所として利用することを奨励する。

d) 地域の発明家、地域の芸術家、地域の著述家、等を招待する。

e) 学校図書館が発明や創造性を刺激する新しいテクノロジーのセンターになるようにする。

9)「協働的学習経験の結果を評価する」の領域におけるスクール・ライブラリアンの役割(抜粋)

a) チーム・ティーチングが行われた時、学習者への効果を測定する方法を考案し実施する。

b) 学習者の成果にデータベースや他の情報資源が与えた影響を測定する。

c) 使われたテクノロジーが教授と学習に役立っていることを証明する手段を考案する。

10)「クラス、図書館ラーニング・コモン、ツールの統合を管理する」の領域におけるスクール・ライブラリアンの役割(抜粋)

a) 研究調査や最善の実践報告等を読んで、最善のアイデアを吟味し採用する。

b) 図書館ラーニング・コモンを最善のアイデアの実験場として使用する。

c) 読書スペシャリスト、テクノロジー統合スペシャリスト、カリキュラム・スペシャリスト等を含めて、学校の特別グループを結成する。

d) 図書館ラーニング・コモンが学校刷新のセンターであることを確かにする。

5. 考察

以下では、NGA Center と CCSSO が共同で作成し、2010 年に公表している CCSS とアメリカの学校図書館界、特にニューヨーク市と AASL の対応について考察する。

最初に CCSS では、基準の内容も重要であるが、その基準は何を目的として作成されているか、ということも考察する必要がある。CCSS の目標は、すべての生徒が高校卒業時に「言語、読み、話す・聞く、書く」や数学の領域において大学進学と就職の準備ができてきていることである。目標を高いレベルに設定すると生徒の成績もそれに応じて良くなるという、さらなる信念で CCSS は高い基準になっている。

CCSS が作成された背景には 3 つの状況がある。1 つ目は、大学に進学する新入生の中に大学の講義について行けない学生がおり、大学は補習授業を余儀なくされている状況がある。そのような状況は、高校教育に対して再考の余地があり CCSS のような学習基準を上げることも 1 つの解決策であろうと思われる。

2 つ目としては、アメリカはこの 10 年余り経済的不況下にあり、グローバルな経済競争でもいくぶん後れを取っているという状況である。そのような経済状況と教育の関係について、例えば外交委員会 (Council on Foreign Relations: 連邦政府との直接的な関係はない組織) 等は、「アメリカの教育の失敗は、アメリカの生徒を競争的な立場に置くことを不可能にしており、そのためにアメリカは国際経済の中で繁栄し、リーダーシップを発揮することができなくなる危険性がある」と述べている²⁰⁾。その経済不況の打開策の 1 つとして、連邦政府や NGA Center は教育改革を求めている。すなわち、国際的な経済競争の中で勝ち抜いていくための人材養成のための教育改革である。

3つ目としては、教育の国際比較の中で、アメリカは先進国の間では比較的低い国の方に入っているという状況である。2009年のOECDのPISA調査において、アメリカは読解力で14位、数学で25位、科学で17位であった。そのような状況を憂えて、オバマ政権は「改革への青写真」で、2020年までに大学・短大の卒業率に関して再び世界をリードすることを目指し、AASLとAchieveの共同作成である『CCSSの実施』は、アメリカの生徒が数学とリテラシーにおいて他国の生徒と肩を並べられるようにするものである、と記している。

PISA調査の結果の解釈に関しては注意が必要である。南カリフォルニア大学(University of Southern California)の元教授で言語学者・教育学者のクラシェン(S. Krashen)は、CCSSを批判する文献の中で、PISAの調査結果を次のように分析する。アメリカの教育の真の問題は「貧困」であり、貧困による食事の不確実性、健康管理の欠乏、読書材へのアクセスの欠乏は、生徒の学習能力を著しく阻害する。貧困層の生徒を除くと、アメリカの生徒のPISA成績はトップに近い。アメリカの貧困層は全体の23%で、先進国間では2番目に多い貧困層を抱えている。なお、常にトップ・グループに入っているフィンランドの貧困層は約5%である。クラシェンは次のようにも論ずる。CCSSを実施すると、注入主義とテストづくめの教育となり、1部のエリートに有利になるような教育になるだろう²¹⁾。

上記のクラシェンの批判を読むと、CCSSが生徒の批判的思考力や証拠に基づく論証力を重視し、学校図書館界のサービス目標と一致しているからという理由だけでは、CCSSを簡単に受け入れる訳にはいかない。何のための教育か、誰のための教育か、という視点からCCSSを考える必要性が生じてくる。この視点で考察すると、CCSSはアメリカが国際的な経済競争の中で勝ち抜いていくための人材養成を第1の目標にしていると言える。表現を替えれば、エリート教育を重視しているということである。確かに、CCSSはすべての生徒が高校卒業時には大学進学や就職の準備ができていることを目標にし、目標を高いレベルに設定すると生徒の

成績もそれに応じて良くなると論じており、成績の悪い生徒や貧困層の生徒を軽視してはいないように見える。しかし、すべての生徒の成績を上げるための政策として、CCSS のような高いレベルを設定することが最善の策であるかどうか疑問が生じる。グローバルな経済競争をしている国の教育政策について考えると、基本的には、国力（経済力）を高めることを優先させる教育政策と貧困層の児童生徒も含めたすべての児童生徒の学習レベルを上げることを優先させる教育政策（福祉的教育政策）の2種があり、その2つの政策は相容れないことが多い。特定の国の現実的な教育政策は、振り子のように状況によってその両端の間を揺れ動いていると言える。そして、CCSS は福祉的教育政策ではなく、国力（経済力）を高めることを優先させる教育政策であると言えそうである。

次に学校図書館界のCCSSに対する反応について述べる。2014年現在でCCSSのwebサイトを見ると、44州とコロンビア特別区がCCSSを教育基準として採用している。その中には、本稿で見たように、いくぶんの修正を施して基準としているニューヨーク州なども含まれている。クラシェンによると、全米英語（国語）教師協議会や全米数学教師協議会等、多くの主題領域の協議会もCCSSを積極的に受け入れているという。クラシェンは、そのような状況の大きな要因としてオバマ政権になってからの教育予算の減少を挙げている。減少している予算の獲得競争のために、CCSSが積極的に受け入れられている、と彼は分析する。図書館への助成も特にオバマ政権になってから減少しており、学校図書館界がCCSSを積極的に受け入れようとするのも無理はない、と彼は論ずる²²⁾。

クラシェンが指摘するように、学校図書館界がCCSSを積極的に受け入れている理由の1つに図書館への連邦政府の助成の減少がある。しかし、本稿第4章で見たように、CCSSはアメリカの学校図書館のサービス目標である「21世紀の学習者のための基準」と整合している。ここで生ずる疑問は、アメリカの学校図書館界、特にAASLは、CCSSやアメリカの多くの教員と同じく、①すべての生徒が高校卒業時には大学進学や就職の準備

ができていることを目標にし、②目標を高いレベルに設定するとすべての生徒の成績もそれに応じて良くなると信じているのだろうか、ということである。目標を高いレベルに設定することには異論はないが、それによってすべての生徒の成績が良くなるというのは神話に近いと思われる。図書館界がモットーとする「すべての人へ公平な情報アクセス」は、学校図書館の世界に変換すれば、「すべての児童生徒へ公平な学習機会」になると思われる。CCSS は「21 世紀の学習者のための基準」と整合しているが、クラシェンによると CCSS は貧困層の生徒を軽視した、1 部のエリート層に有利になる教育になる可能性（危険性）があると言う。学校図書館界が CCSS を受け入れるとしても、現場のスクール・ライブラリアンはクラシェンが指摘する陥穽に陥らないよう、留意する必要があると思われる。

ニューヨーク市の「エンパイア・ステイト情報フルエンシー連続体」(ESIFC) も『CCSS の実施』も、学校図書館サービスの目標達成や CCSS の実践に際しての教員とライブラリアンの協働やチーム・ティーチングを重視している。しかし、ラーシャム (D. Latham) 等の研究調査によると、教育学の文献に出現する「協働」は教員間であり、ライブラリアンとの協働は極めて少ない。また、大学の教員養成のカリキュラムでも「ライブラリアンとの協働」というトピックは少ないことが分かったという²³⁾。アメリカのスクール・ライブラリアンが学校図書館サービスの目標を達成しようとする際、または CCSS を実践に移す際には、最初に教員とライブラリアンの協働の重要性や必要性を教員に理解してもらう必要があると考えられる。

6. 結び

本稿では、アメリカにおける CCSS と学校図書館界について概観し考察した。2010 年に公表された CCSS は、現在アメリカの義務教育界で大きな話題になっている。作成機関の NGA Center と CCSSO (厳密には CCSS Initiative) は 44 州とコロンビア特別区が CCSS を教育基準として採用していると誇らしげに記し、連邦政府もバックアップしている。しかし、44 州

の中に入っていたインディアナ州 (State of Indiana) は最近脱却し、2014 年に独自の教育基準を作っている。このように、CCSS は未だ流動的である。この流動的な CCSS に対して、AASL は Achieve と組んで 2013 年に『CCSS の実施』を作成しているが、それがアメリカの学校図書館界でどのような影響を及ぼしていくか、今後を見守る必要がある。

註

- 1) 井上靖代「米国の学校図書館と電子書籍— Common Core State Standards が与える影響の可能性」『現代の図書館』51 巻 4 号、p. 217-22.
- 2) Common Core State Standards Initiative, About the Standards. <<http://www.corestandards.org/about-the-standards/>> [2014-2-18]
- 3) Common Core State Standards Initiative, *Anchor Standards*. <<http://www.corestandards.org/ELA-Literacy/CCRA/>> [2014-2-18]
- 4) (U. S. Department of Education, “Overview Information; Race to the Top Fund,” *Federal Register*. Vol. 74, No. 221. 2009. <<http://www.gpo.gov/fdsys/pkg/FR-2009-11-18/pdf/E9-27427.pdf>> [2014-3-9]
- 5) U. S. Department of Education. “Race to the Top: Executive Summary, 2009,” *The Washington Post*. Feb. 15th, 2011. Keith Nitta, “Revisiting Politics of Structural Education Reform,” 所収：日本教育行政学会『第 48 回大会：〈日一韓〉教育行政学会共催国際シンポジウム』(p. 31) に拠る。<<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/compoli/taikai/07symposium.pdf>> [2014-3-9]
- 6) U. S. Department of Education, *A Blueprint for Reform: The Reauthorization of the Elementary and Secondary Education Act*. <<http://www2.ed.gov/policy/elsec/leg/blueprint/blueprint.pdf>> [2014-3-15]
- 7) Common Core State Standards Initiative, *Development Process*. <<http://www.corestandards.org/about-the-standards/development-process/>> [2014-4-15]
- 8) Common Core State Standards Initiative, *Standards for English Language arts & Literacy in History/Social Studies, Science, and technical Subjects*. p. 7. <http://www.corestandards.org/wp-content/uploads/ELA_Standards.pdf> [2014-4-15]
- 9) New York City Department of Education, *Standards*. <<http://schools.nyc.gov/Academics/CommonCoreLibrary/About/Standards/default.htm>> [2014-4-23]
- 10) New York City School Library System, *Empire State Information Fluency Continuum: Benchmark Skills for Grades K-12/Assessments/Common Core Alignment*. <<http://schools.nyc.gov/NR/rdonlyres/1A931D4E-1620-4672-ABEF-460A273D0D5F/0/EmpireStateIFC.pdf>> [2014-4-23]
- 11) *ibid.*
- 12) American Association of School Librarians, *Learning Standards & Common Core State*

- Standards Crosswalk*. 〈<http://www.ala.org/aasl/standards-guidelines/crosswalk>〉 [2014-5-12]
- 13) Achieve and American Association of School Librarians, *Implementing the Common Core State Standards: The Role of the School Librarian*. 〈<http://www.achieve.org/files/CCSSLibrariansBrief-FINAL.pdf>〉 [2014-5-12]
- 14) *ibid.*
- 15) *ibid.*
- 16) MetLife, *The MetLife Survey of the American Teacher: Preparing Students for College and Careers*. 2011. 〈https://www.metlife.com/assets/cao/contributions/foundation/american-teacher/MetLife_Teacher_Survey_2010.pdf〉 [2014-6-2]
- 17) MetLife, *The MetLife Survey of the American Teacher: Collaborating for Student Success; Part 1: Effective Teaching and Leadership*. 2010. 〈https://www.metlife.com/assets/cao/contributions/foundation/american-teacher/MetLife_Teacher_Survey_2009_Part_1.pdf〉 [2014-6-2]
- 18) Achieve and American Association of School Librarians, *op. cit.*
- 19) *ibid.*
- 20) Council on Foreign Relations, *U. S. Education Reform and National Security Report*. No. 68. 2012. 〈<http://www.cfr.org/united-states/us-education-reform-national-security/p27618>〉 [2014-5-20]
- 21) S. Krashen, “The Common Core: A Disaster for Libraries, A Disaster for Language Arts, a Disaster for American Education,” *Knowledge Quest*. Vol. 42, no. 3, 2014, p. 37-45. 〈<http://skrashen.blogspot.jp/2014/01/the-common-core-disaster-for-libraries.html>〉 [2014-5-20]
- 22) *ibid.*
- 23) D. Latham, et. al., “Preparing Teachers and Librarians to Collaborate to Teach 21st Century Skills,” *School Library Research*. Vol. 16. 2013. 〈http://www.ala.org/aasl/sites/ala.org/aasl/files/content/aaslpubsandjournals/slr/vol16/SLR_PreparingTeachersLibrarianstoCollaborate_V16.pdf〉 [2014-6-3]

a (本学教授 図書館情報学)

b (元同志社大学教授 図書館情報学)

〈キーワード〉 全州共有基礎基準、アメリカ・スクール・ライブラリアン協会、共通基礎学習基準